

武蔵野日曜集会 聖書講筵

終末的追求

――ピリピ書第3章――

1981年1月4日

小池辰雄

ネオスとカイノス 新宗教改革 アナテマ魂 キリストの中で喜びなさい 悪しき労働人 キリストの信仰による義 我は地球なり 天国人となることを追求 一以貫之 ベートーベン記念碑除幕式の演説 廓然無聖 宗教復興 我らの国籍は天に在り 祈り

【ピリピ3】

1 終に言わん、我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には安然なり。

2 なんじら犬に心せよ、悪しき労働人に心せよ、肉の割礼ある者に心せよ。

3 神の御霊によりて礼拝をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我らは真の割礼ある者なり。4 されど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃むところありと思わば、我は更に恃む所あり。5 我は八日

めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、6 熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なりし者なり。7 されど曩に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。

8 然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく

思う。9 これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなわち信仰に基きて神より賜わる義を保ち、キリストに在るを認められ、10 キリストとその復活の力とを知り、又その死に効いて

彼の苦難にあずかり、11 如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。12 われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。13 兄弟よ、

われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向かいて励み、14 標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる褒美を得んとて之を追い求む。15 されば我等のうち成人したる者は、みな斯くのごとき思いを懐くべし、汝等もし何事に



でも異なる思いを懷き居らば、神これをも示し給わん。16ただ我等はその至れる所に随したがいて歩むべし。

17兄弟よ、なんじら諸共もろともに我に效ならうものとなれ、且かつなんじらの模範となる我らに循したがいて歩むものを視よ。18そは我しばし汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。19彼らの終は滅亡ほうびなり。おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念う。20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主すくいぬしとして其の処きこより来りたもうを待つ。21彼は万物を己したがに服ちからわせ得る能力によりて、我らの卑いやしき状さまの体からだを化かえて、己が栄光の体かたどに象かたどらせ給わん。

●ネオスとカイノス

「新年」と言いますが、これはグルグル回転している。なんとなく新しい気持ちになる。それはいいです、人間的な感情でね。ギリシア語には「新しい」という言葉に二通りありまして、「ネオス」と「カイノス」という。ネオスというのは、新しくなつては古びてしまう。はかないんです。カイノスというのは、変わらないところの新しいで、常に新しい。だから「新約聖書」のことは「ヘー カイナー ディアテイケー」といまして、この「カイノス」の字が使つてある。キリストの「新しい約束」というのは絶対不変である。永遠に新しい。この「カイノス」の方は、「永遠的な」という意味と同じ気持を持った字です。

我々人間は、移りゆくところの新しいさをいつも喜んでゐる。新品といつてね。だんだん古びていく。それでまた捨てては新しいものを得る。もう仕方がないですよ、それは一面、真実な現実だから。

けれども、いよいよ新しくなつていくというのがこつちの「カイノス」の方です。新あらたになつてやまないという、そういつたカイノス。常に新たであると同時に、いよいよ新しくなつていく。我々は年々、新たになつていく。そういう意味において、この新年という気持を私たちは自覚したいと思う。

「また古くなつてしまつたが、まあ仕方がない、また新しく」
なんて、そんな情けない新しさではない。パウロが言つたでしょ、

「外なる人は衰えていくかもしれないが、内なる人は日々に新たなり」
という、あの

「日々に新たなり」

というのがこつちの方です。キリスト者はそのような、日々に新たなる新鮮さを魂が持つていなければならない。またそのはずであります。御霊がある限り。



●新宗教改革

私は今度、『エン・クリスト』（第3号、1981年2月冬号）の巻頭言にこういうのを書きましたから、皆さんに読んでさしあげましょう。

「新宗教改革」 七七路の峠にて 一九八一年二月七日 小池辰雄

ルターはヴィッテンベルク城教会の門扉に九十五ヶ条の提題を掲げてローマ教皇の免罪符に対する神学的反論の火蓋を切った。そのことが期せずして宗教改革の導火線となった。

その歴史的提題の第一条は、

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをなせ…』と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきを欲し給った」

というのである。この一言はこの全提題の根本命題である。イエスの伝道の第一言は、「汝ら悔改めよ、天国は近づきたり」（マタイ4・17）であった。「汝ら悔改めよ」はヘブライ語では「シキューブ」であり、ギリシア語では「メタノエイテ」であり、ラテン語では「トランスメンタミニ」であって、「立ち帰れ」であり、「心を翻えよ^{ひるが}」であり、「心を回らせ^{めぐる}」である。即ち自己中心の心を転向して神中心になれ、ということである。これは謂わばたましいの世界のコペルニカスの転向をなせ、ということである。而も全生涯を貫いてつねに新たに神・キリストに転向しつつ進め、というのがキリストの聖意であるとルターは叫んだのである。

このことは単に個人の生涯に於て福音的真理であるばかりでなく、各時代に妥当する真理である。ルター、ツヴィングリ、カルヴィンの宗教改革のあと、プロテスタント教会史はしばしば革新の運動を見た。プロテスタンティズムは自己自身にプロテストすることがその本質である。諸宗派が生ずるのはやむを得ない。むしろ諸宗派があつて可いのだ。問題はその特殊性、相対性の中に絶対的なもの、聖霊があるかの一事である。聖霊があれば多即一、一即多の真理が実証される。パウロのコリント前書12章、14章がそれだ。

日本では内村鑑三によつて無教会という現象が起きた。ルター的な「信仰のみ」（ソラ・フィデ）を徹底させようという精神である。私もその流れに育ったものだが、1950年の晩秋、大阿蘇のふところにある瀧見荘で手島郁郎氏と集会を共にした際、この集会に聖霊のペンテコステ的降臨が起きた。ここに彼と私とは無教会の陣営を出て、福音の原始に、使徒的次元の信仰に立ち帰ることを期せずして夫々宣言することとなった。十字架・復活・聖霊不可分のキリストへの直接的帰入であり、祈入である。今や全キリスト教界は天からこのことを新たに要め^{もと}られている。我ら日本キリスト召団もその一環を承つてどこまでも前進せんのみ（カイノ斯的（新）改革を営む）。



●アナテマ魂

それから、「独和対照」のところは――前にI君の雑誌に私は「アナテマ魂」というのを書きました――あれを少し文章を変えて載せることにしました。

「アナテマ魂」 「独和対照」 天震

パリサイ派の一首魁^{しゅかい}であったパウロは、彼が聖霊によって全く別人となつてから、ユダヤ人をパリサイ根性から福音へと救いたいと思った。

それで彼は呻いて叫んだ、

「わが同胞のためならんには、キリストに呪われた者（アナテマ）となるとも、我自ら願うところなり」（ロマ9・3）

と。しかし彼は今もなおユダヤ人からアナテマあつかいにされている。否、実にキリストこそは今もなお十字架上のアナテマである（ガラテヤ3・13）。

聖霊のバプテスマをキリストから受けたまことのキリスト者が（ロマ8・9）、聖霊の体験なきキリスト教界一般において謂わばアナテマとされている。

「^{そし}謗る者は汝の謗るに任す。喘^{わら}う者は汝の喘^{もと}つに任せん。

天公本より我を知る。他人の知るを覚めざるなり。」

幕末の大先覚佐久間象山はこのような詩句を吐いている。まことに「天公本知我」。

アナテマ魂で祈らんのみ（ルカ6・28〜36）。

そういうわけです。第3号も非常に内容があれですから期待してください。

それから、『世界日報』という――そう大きくもない新聞ですが――それに私は今、連載しているんですけども、第9番目に「宗教復興」と題して書きました。これはあとでお読みします。その新聞の年頭元旦号――明日頃届くと思うけれども――それに8枚ほど書きました。

●キリストの中で喜ばなさい

今日は「終末的追求」と題しました。ピリピ書第3章です。このピリピ書というのは多分、パウロがローマに滞在している時に書いたものとされています。使徒行伝28章16節から31節に出ている。パウロは、第二回目の伝道でピリピを訪ねたので、だいたい紀元50年頃です。ピリピを訪ねたその伝道そのものは、使徒行伝16章6節から40節です。パウロはローマで軟禁状態でしたから、これは獄中書簡です。エペソ、ピリピ、コロサイはそう。獄中にありながら、パウロは

「喜べ、喜べ」

と言っている。まあなんと盛んな魂かと思えます。いわゆる「信仰」なんていう次元ではない。全くキリストと一つになっている。彼は「エン・クリスト」（キリストの中）そのものなんです。



もう絶対に私は闘いますから、あんなパリサイ無教会とは。相手が何人いようと絶対に負けません。とにかく、聖霊の体験を本当にしないことにはダメです。聖書の次元はそんな生易しい次元ではない。

ピリピ書は、私は大好きな書の一つです。誰かピリピ書を暗唱してもいいですよ。エペソ・ピリピ・コロサイというこの三部曲は素晴らしい。ローマ書は大建築だけれども、エペソ・ピリピ・コロサイは天上の音楽みたいだ。

「終に言わん、

パウロの自分の終わりと、どっちもかけたような言葉です。

我が兄弟よ、なんじら主に在りて喜べ。

3章でもまたそう言っている。

「主の中で喜べ」

と。「に在りて」「に在つて」という言い方が日本語では何かひとつの形容詞的な気持ちになっているから困る。「の中で」の方がいいくらいです。

「キリストの中で喜びなさい」

という。「仰いで」いるのではない。「の中」に入っているんだ、キリストの懷の中へ。あなた方は祈りで本当にその中へ入っていますか。

そういう意味ではもう無教会とはハッキリ違う。無教会の姿には、人間的な信仰の頑張りがないぶんあるです、あのポーズには。信仰的ながんばりではない。もう、「その中」で爆発するような驚くべきところです。

「主にありて喜べ」

と。

「キリストの中に入れば喜ばざるを得ないね」

ということですが、「喜べ」なんて言ったって。

「喜びますよ。キリストの中にあつては、うれしくてしょうがありませんから」

と。パウロが「喜べ」なんて言ったって、そのあとに「喜ぶねえ」と入るくらいなものだ。なにか聖書の言をいわゆる律法的に読んだらダメですよ。みんなもの凄い現実の、力ある、光ある、喜びのある、忍耐力のある、そういった現実をぶちまいているんだから、パウロも、キリストも、ペテロも。「何々せよ」なんて言ったって、「できるぞ」という意味だよ。仕方がないから、あれは「せよ」と言っているんだろうね。

本当は、新約聖書はもうそんな「せよ」なんてのはやめて、全部私は改訳してしまおうかな（笑）。新約聖書のデタラメ訳を、文法超越訳を。しかし、本質訳を。本当にやりたいよ。

「しよがない野郎だな、小池なんていう者は」

と、悪口をうんと言われて、アナテマ（呪い）にされて、それで結構だ。それくらい私は例外者です、本当に。もういいんです、例外者で。



キリストは例外中の例外だったんだ。こんな人はありやしないんだ、世の中に。お釈迦さんだってかなうもんか、キリストには。

「ただ一人のひと」(デア・アインツィゲ der Einzige)
なんだ。「アインツィヒ・アルティツヒ」(einzigartig) というドイツ語があるが、

「もう他に種類の無い特別なもの、独一な質をもったもの」
という意味です。

皆さんは、顔がみんな違うね。けれども、聖霊がくると――みんな目が二つ、口が一つ、鼻が一つでみんな同じなんだけれども――神さまは芸術家だから、みんなそれぞれ特殊につくって、世界にみな一人びとりが「アインツィヒ・アルティツヒ」なんですよ、あなた方は。我々はみんな絶対、特殊、存在なんですよ、相対的なものでありながら。目が二つで鼻が一つで耳が二つでということでは、相対的に同じなんだ。けれども、その相対的同じさにおいて、絶対的な質があるというのが神さまの芸術の素晴らしきなんだ。

「最大の芸術家は神さまだ」

と言っている。『芸術のたましい』という第2巻も大事な巻ですよ。なにもゲーテやダンテの恋愛のことを書いているのではない。あの二人の恋愛も「アインツィヒ・アルティツヒ」なんだ。どっちも非常な特殊性をもっている。……隠れなき魂です、私の中で生きているものは。体裁ではないんです。

● 悪しき労働人

「兄弟よ、主にあってうれしいではないかと。」

なんじらに同じことを書きおくるは、我に煩わしきことなく、汝等には平安である。

² なんじら犬に心せよ、^あ悪しき労働人^{はたらきびと}に心せよ、

ユダヤ人のことです。この「悪しき労働人」というのは、労働に捕らわれている、働きに囚われている人のことを言う。働くことは大事なことです。けれども、働きにとらわれたらいかん。魂がおるすになる。パウロがかつてそうだった。律法の義を^{きゆうこう}実践躬行して、大いにいいと思っていた。ユダヤ人は、「犬」という動物を非常にさげすむ。非常に忠実だということあまりみなかつたらしい。

肉の割礼ある者に心せよ。

肉の割礼で、魂の割礼をしてない。即ち、ユダヤ的な宗教は、割礼ある者が特別に神に選ばれた者だと思っている。

³ 神の御霊によりて礼拝をなし、キリスト・イエスによりて誇り、

これも「キリスト・イエスによりて」ではなく、「キリスト・イエスにありて」です。



肉を恃^{たの}まぬ我らは真の割礼ある者なり。

「キリストにある」ということと「神の御霊にある」ということはもちろん同じです。

4 されど我は肉にも恃^{たの}むことを得るなり。

というのは、パウロは血筋のことを言っている。

もし他の人、肉に恃^{たの}むところありと思わば、我は更に恃^{たの}む所あり。5 我は八

日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統^{ちすじ}、ベニヤミンの族^{やから}、

もう正統なんだ、彼は。ヤコブの直系だから。

ヘブル人より出^いでたるヘブル人なり。

生粋のヘブル人でヘレニストではない。異邦人でユダヤ教になったような者ではないと。

律法に就きてはパリサイ人^{びと}、

「別たれたる者」即ち、宗教的特権階級と自らを任ずる者が「パリサイ人」。そして律法はよく知って、そしてこれを実行する者、これが「パリサイ人」です。それ自身は悪くはない。それを誇るところに大きな間違いがある。神さまではなくて、律法になってしまっているから。律法にとらわれているわけだ。もしとらわれるならば、神にとらわれることだけはいいんです、神・キリストにとらわれることだけは。だから、

「自分はキリストの囚人^{めしうど}である、囚われ人だ」

とパウロは言った。ところが、神・キリストに囚^めわれることが最大の自由なんです、相手が絶対者だから。

6 熱心につきては教会を迫害したるもの、

ユダヤ教に対する熱心でキリストのエクレシヤを迫害した。キリストを信ずる者を迫害した者。

律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり。

というんだから大変なもんだ。完璧だという。「ヨブは全き人^{まった}」という、あの「全き」と同じような気持を彼はもっていたらしい。「責むべき所、間然^{かんぜん}するところなし」という。非難するところがない。そういうわけで、

「もしそういうものを誇ってよければ、私だって誇れるぞ」

と、パウロはそういう誇りたいやつなんだ、本来。ダンテもゲーテもそういうところがあったね。けれども、みんな偉いやつはそこを乗り越えてしまう。驕^{おご}りたかぶるやつに大きな重荷を背負わして低姿勢にするようにして歩かすところが『神曲』の中に出てくる。あれはダンテの自分の姿です。

7 されど曩^{なほ}に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。

問題じゃないと。もうキリストを得たら、他のものはバカらしくてしょうがなくなった。そんなものは無価値になってしまったと。

8 然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優^{すぐ}れたるために、



もちろん、「知る」は、^え靈知することです。エピグノーシス、靈知する。全存在でこれを知る。「汝はわがもの、我はなんじのもの」

というような、そういう間柄がこの「知る」です。

凡ての物を損なりと思ひ、^{すべ}彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥の^{ちりあくた}

と。聖霊をとられたら、私はどうにもならんね、正直。

「キリストと代えるもの、聖霊と代えるものはない」

と。聖霊をとられたら、私はどうにもならんね、正直。

●キリストの信仰による義

9 これキリストを獲^え、かつ律法による己^えが義ならで、律法による自分の義なんていうものではなくて、

唯キリストを信ずる信仰による義、

「キリストを信ずる信仰」と書いてあるけれども、ギリシア語ではただ「キリストの信仰」と書いてある。「キリストの信仰による義」というのは、

「キリストを信ずること、あるいは、キリストの信によってたまわりたる義」
どっちの意味ももっています。両義をもっていると思います。

すなわち信仰に基づきて神より賜る義を保ち、

即ち、信仰に基づいて、自分がキリストを全面的に受けとることによって、神さまからキリストを通していただくところの義。「信仰によって義とされる」というのはこのことですよ。

「信仰に基づきて神より賜りたる」

を忘れてはこまる。

「信仰によって義とされる」

というのは、自分の信仰がなにか偉くなってしまうて、それで「義とされる」なんて思ったら、とんでもない間違いだ。「信仰」は何ものでもない。相手を全面的に受けとることを「信仰」というので、「信仰」それ自身は何ものでもない。賜りたるところのキリストの具体的な義です。神さまを100%に生きるという、そういう姿、そういう内容が義なんです。それを賜る。

「汝の御意をなさせたまえ。どうぞ、私をお使ください」

という、その姿が義なんです。そういう信に生きる者を「義人」という。

「義人は信仰によって生きる」

というのは反対なんだ、本当は。

「信に生きる者が義である、義人である」

ということ。あれは全稱的判断なので、原因・結果の判断ではない。



キリストに在るを認められ、
神さまに、

「お前は本当にキリストにある。キリストはお前の中にある」
と認められ、

10 キリストとその復活よみがえりの力を知り、
この「知る」というのはもちろん自分で体験していることです。復活の力が来ているんだからね、御霊で。

又その死ならに効いて
「その死に効いて」というのはむしろ、「死に同化して」という言い方です。その死に同化して、

彼の苦難にあずかり、

十字架の死を死んで、キリストと共に十字架せられて、彼の苦難にあずかり、

11 如何にもして死人の中より甦よみがええることを得んが為なり。

パウロも最期には殉教だったでしょ。もう既に甦よみがえっているんです、彼は。けれども、具体的に本当の復活を受けとる。

● 我は地球なり

12 われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉とらえんとて追い求む。

もちろん、人間は地上においては満月ではない。みんな欠けたるものです。質は満月のだけれども、現実の内容は欠けたるものです。欠けたるものの中に満月の姿がある。そういった質がある。それは聖霊を受けとると、そういうことになる。だから、確信ならざる確信が来ている。

キリストは之を得させんとて我を捉とらえたまえり。

ダマスコ途上で捉えられた。キリストに捕まった。いいね、キリストに捕まるということは、一番楽しい、一番ありがたいことなんだ。ひっくり返されて捕まった。

「私はお前をつかまえた。放さないぞ」

と、キリストが。使徒行伝9章でキリストはそのことを言っている、

「これは選えらびの器である」

と。散々、方向が間違っていたけれども、ひっくり返して、

「今度は天動説を地動説にお前を変えてやった。地動的存在に変えてやったぞ。神・

キリスト中心に回転しろ」

と。それで、パウロは、神・キリストを中心に回転する、神・キリストを太陽としてグルグル回る地球になったんだ、彼は。太陽が回っていると思っていたら大間違いだったと。



地球を私たちが冥想して、本当に地球になったらいいですよ。

「我は地球なり。太陽によつてグルグル回されている地球である」

と。「我は地球なり」なんて、私は今日初めて言った。地球上の人間ではない、地球そのものだ。そして冥想してごらんさない。もの凄いくことになるから。光を受けて、そして地球からは諸々の物が生じ、花が咲き、鳥が歌い、何でも乗つけてしまつて、大ビルディングだつて何だつてみんな、「お前は重いよ」なんて言いやしない。何でも支えて乗つけてしまっている。こんなに地球の恩恵にあずかっているのに、お前たちはなぜ喧嘩するかと。

●天国人となることを追求

キリストに捕まつてしまつたんだ、パウロは。

13 兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、

自分がとらえたのではない。キリストに捉えられている。キリストにとらえられているので、自分はまだとらえたとは思つていないと。

唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向かいて励み、^{14 標準}
を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる
褒美を得んとて之を追い求む。

ということとは、簡単に言つてしまうと、天人となることを追求する。既に天人なんです、彼は。御霊をいただいているし。けれども、今は矛盾的存在だからね、罪びとにすぎない。

「我は罪びとの首なり」^{かしら}

という。でありながら、キリストの義をいただいているから、

「罪びとにして義人だ」

と。ルターがパウロのことをハッキリ見て、そう言つた。その通り。だから、これが本当に、
「ついにキリストの姿に化する」

ことを追求してやまない。キリストを追求してやまない。これが「終末的追求」
(Eschatologischer (エスカトロギーシア) Drang (ドゥラング))と私が今日書いたゆえんです。
ゲーテの『ファウスト』は、ファウスト的追求(ファウステイシア・ドゥラング)という。
また別な言葉でいうと、本然の我を追求する。賜りたるところの本然の我を追求する。小
我ではない。「小我を完成しよう」なんて、そんなことではない。それは「律法の義」の方だ。
「大我となる」

ことなんです。キリストの御霊をいただかなければ、大我とはなれない。そしてもう、そ
の霊的次元は限りないから、「これでいい」なんていうところは絶対にない。地上でどんな
に素晴らしくても、「これでいい」ということはない。

キリストだけが「これでいい」ひとだったね。キリストだけは全く桁がちがう、イエス
というひとは本当に。五つのパンと二つの魚から五千人のものに与えて、なお十二の籠に^{かご}



満ちるような、そんな驚くべき力を誰がもっているか。大変なひとだね。地の果てまでも世の末までも生命を与えてやまないのがこの霊界のキリストです。何人いようが何億人いようが、問題じゃない。その徴があのだと地上でなさったこと。霊界のキリストはもつと凄い。「信仰」なんていう、「私の信仰」なんか、そんなものはちゃんちゃらおかしいです、そんなことを言っているクリスチャンは。自分の信仰なんて何だと思っているかと。だから私は「無」と言うんです。無限無量なものが展開してやまないから。

普通のひとにわかるようなものではない。けれども、これは誰でもが入れられます。

●一以貫之

そういうパウロは、キリストにつかまえられたから、追求してやまない力が来ている。いわゆる理想主義でも浪漫主義でもない。楽しいんです、この追求は。この終末的追求というのは苦しくない。楽しい。追求してやまず、またその生命を人に与えてやまず。可哀相な人、苦しんでいる人、それを本当に実践的に愛していききたいと。御霊の力を与えていくんです、愛するとは。また、具体的に物を上げてもちろん結構なことです。愛し方はいろいろありますから。ただ感情で愛しているのではない。具体的に相手を助けていく。

私は御霊の力でいろいろな力が働いてくださるから、やります。「追求してやまず」ということと、「与えてやまず」ということが一つなんです。追求してやまざれば上から流れてくるからね、それがどんどん泉となり、力となり、光となり、生命となり、人に与えざるを得ない。よどんでいたらダメです。「証者」というのはそういうことです。

キリストの証者というのは、

「私は救われました。おしまい」

なんていうのは、そんなものは今に腐ってしまう。この一年間に一人を本当にこの世界に入れてやろうと思ったら、祈っていて、誰か引つ張つて来なさい。失敗したっていい。

「なんだ、小池先生は」

なんて出て行くやつがあったってかまわないよ。

とにかく、そういう追求してやまざるところの生命となる。追求しようと思わなくても、ざるを得ないところの世界になる。キリストを追求してやまずと。御霊の世界はそんなものですよ。そして、そのことは具体的に、あなた方が賜りたるいろんな才能、資質、それをもって証しするわけです。

「一以貫之」（いつもこれ貫く）

という。これは孔子の言葉のうちで私は一番好きな言葉です。「一もつて之を貫く」と。

今の学校教育も、一人ひとりがこれでいかなければいけない。

「お前はこの科目は絶対に優をとって行け。他はゼロでもいいよ」

と言いたいところだな。それを、「平均点が何点足りないから、落ちるの落ときないの」と、



なんてまあくだらないことか。私は会議でもそれを言ったことがある。

「学校は先生と生徒の火花が散るような現実だけが問題だ。その他のことはどうでもいいんだ。一もつて之を貫く。私の生涯の目的はこれだ」と

そうしたら、それを中心に展開していく。孔子にとつては、「一もつて之を貫く」の、その内容は「仁」でしただけども。仁とか恕^{じょ}、思いやり。もちろん、パウロのコリント前書13章の愛です。キリストももちろんその愛を貫いたひとです。

●ベートーベン記念碑除幕式の演説

私の好きな――時々、引用しますが――グリルパルツァーの、ベートーベンの記念碑の除幕式の時に語った彼の言葉。ベートーベンの奥津城^{おくつきぎ}におけるところの演説です。1827年3月29日に埋葬された。彼は26日に仆れたからね。

「ドイツの言葉と舌におけるところの歌の英雄、しかし、ドイツの響く歌の最後のマイスター、彼は芸術家であつた。彼があつたのはただ芸術によってのみあつたのである。

「芸術」(クンスト)とはもちろん音楽です。

人生のいろいろな針が彼を深く傷つけた。ちょうど難破者が岸にしがみつくように彼は汝の腕に、汝、おお善と真の同じような素晴らしい姉妹

即ち美の世界、芸術のこと。

悩みの慰め手、上から発しているところの芸術

即ち音楽、

それに汝はしがみついた。

この音楽によって、彼は自殺しようと思つたのを思いとどまつて、始まつたわけでしょ。「波うつような交響曲」というのは、

「歓喜よ、神々の美しき火花よ、楽園に生れ出でし娘子よ」

という、あの有名なシラーの詩を最後の第四楽章の中に織り込んだ、あのことを言う。

彼は芸術家であつた。しかし、彼は言葉の最も完全な意味におけるところの人間であつた。」

今は政治家も本当の人間が、本当の「メンシュリッヒカイト」(人間性)をもつた人間がないから、大政治家がいらないわけです。どの世界でもそうです。最後は、

「本当にその人が人であるか」

ということ。その本当の人は、申し上げている通り、霊がとどまっているのを「霊止^{ひと}」という。神霊の止ま^{とど}まっているのを「ひと」という。一切のイデオロギーを超えたところの世界、そこに魂が坐っているひと。そういうのが欲しいね一番、政治家の中に。そうすればもう、ソ連だって中国だって全部、どこでも本当に握手してやるよ、それだけの魂にならなければ。

「戦争は本当によそうではないか」



と、それだけのことを隠しなく言えるひとがいないものな。偽りの平和ばかりだものね。『あまりに過度の溢れるような情感を彼はもっている。それはかえって普通の情感を避ける。死に至るまで彼は人間的な心をあらゆる人に対して保持していた。彼の身内の者たちには父らしい気持を、また彼の霊的な財と血をあらゆる世界に。彼はそういう人であった。そのようにして彼は死んだ。そのようにして彼はあらゆる時代に対して生き続けるであろう。彼の墓石は簡単である。彼自身が地上の生活においてそうであったように。この墓石はちつとも大きくない。』

偉大な人間だから大きな墓石を建てるかとおもうと、そんなものではないと。

もしこの墓石が大きければ大きいほど逆に、この偉大な人間に対するところの距離は大きくなるであらう。」

大きくなると逆にそれはこの人を表すことにはならない。小さな墓石で結構だと。乃木将軍もそうですね、非常に素朴なお墓です。それで最後に引用したいのは、

「この霊的に非常に貧困な、乏しい時代において、靈感の瞬間はなんとまれではないか。汝ら、自らを潔められよ。ここに神の霊に、完全に霊を靈感つけられたところの、この人がここに横たわっている。」

ある一つのことを追求しながら、一つのことのために心をもちいながら、一つのことのために耐え忍びながら、一切のものを一つのために投げ打ちながら、この男は生涯を費やしていた。彼には妻がなかった。子どももなかった。この世の喜びもなかった。楽しみもなかった。一つの眼が彼を躓かせれば、彼はそれを引っこ抜いてしまった。

というような、そういう魂であったということ。キリストの言です。

そして、目的に向かつて前進また前進してやまなかった。」

と。ベートーベンはそのような魂であった。それで今、万人をいつまでも地上の歴史の終わるまで、あの音楽は慰め励ますのである。ベートーベンは「一もつて之を貫」いた。彼は偉大な天才的な質をもった人ですけれども。我々はみな

「一もつて之を貫く」

をできるんです、誰でもが。どうぞ、そのようにして、そのことが我々にとっては、キリストの証者でなかったら、その「一もつて之を貫く」は空しいです、キリストの証者として。さつきパウロが、

「わざいに囚われたような者に気をつけろ」

と言ったように、「一もつて之を貫く」といつても、一なるものにいわゆるこだわるような「一」だったらダメなんです。その「一」をもつて神の栄光を、キリストの証者たることを表す、そういう「一」であれという。それは自分自身は無者。もうそういう気魄になったら、人に何と言われようと、私心がないんだからね、そこは。



●廓然無聖

「聖諦第一義」というのが『碧巖録』の第一則にある。「聖諦」とは聖なる悟り。諦めという字だけでも。

「挙す。梁の武帝、達磨大師に問う、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に対する者は誰ぞ。磨云く、識らず。」

聖諦第一義は何かと聞いたたら、廓然無聖だと言う。私は我々の集会のことを「聖会」と言わない。ただ「集会」で結構だ。「廓然」というのは、広々としてつかみどころのないような広大無辺なことを「廓然」という。広大無辺であつて、また無量であるから、「聖の、聖でないの」と、そんなことを言っている世界ではないと。無聖の聖という。

同じ言葉がそのあとから出てくる。無念の念を念とし――これは白隠も言つてたね――無行の行を行とし、無言の言を言とする。無宗の宗を宗とする。

「無念の念を念とする」

とはどういうことですか。無念となると、私たちにはキリストの念がくる。それをわが念とするということです。聖霊の念が入ってくる。それがわが念である。自分の小さな念ではない。祈りなき祈りを祈りと言つたつていいですよ。

「祈るべきところを知らざれども、聖霊言ひ難き呻きをもて執成し給う」

というのが、祈りなき祈りを祈りとするということです。今、私はここでもつてパツときた、ローマ書8章26節が。普段、よく聖書を読んでいきますか。喰らわなければダメですよ、聖書を。食べなくては。意味ではない。

「わが思いにあらず、汝の思いを」

というのがこれなんです。無念の念を念とする、キリストの。

「わが念にあらず、汝の念を成させ給え」

というのが、

「無念の念を念といたしますから、どうぞあなたの念を」

ということ。それが福音の世界はハッキリしているんだ、禪よりも。なにかこつちは悟りの世界で、とらわれるざる宇宙的な念となることをもちろんこれは指しているんでしょけれども、福音の世界ではもうハッキリしている。聖霊だから。

だから、何を読んでも、キリストの光で全部つかんでしまう。内容を本当に与えることができる。そんなケチくさいものではないですよ、福音は。もうそういう境地になったら、ありがたくてしょうがないです。楽しくてしょうがない。何でも湧いてくるから、宇宙的になるから。

これが私たちが本当に追求してやまざるところのキリストであり、神である。そしてとにかく、追求よりも、上から流れてくるから。上から降ってくる、注いでくる。

「求めよ、さらば与えられる。」



尋ねよ、さらば見出す。

門を叩けよ、さらば開かれる」

と、キリストが言われた。与えようとしてやまず、開こうとしてやまず、尋ねてやまないんだ、向こうから。だから、必ず与えられ、必ず開かれ、必ず見出す。そういう上からの、太陽の力が、光が、引力が、生命がやって来ている。

日本の国旗は素晴らしいですよ、国旗を冥想するだけでもう福音の世界だ。日本人は今まで——私は明治の人間だから——一日、二日、三日とちゃんと国旗を掲げていたものですよ、昔。ところが、私は一日に掲げたけれども、ここら近所に国旗を出しているのをほとんど見なかった。これ日本人かと思ったね、正直。国旗を出すと「国粋」と、軍国主義と思われるのかね。大きな声で

「バカ！ 私のは福音だ」

と言いたくなるよ。まあ、キチガイだよな、私は。気が違っているんだ、そこらのとは。

「神のためには狂えるなり」

とパウロが言ったではないですか。

●宗教復興

この「世界日報」の第九番の「宗教復興」(著作集第6巻『随想集』:第一部 福音の冥想 三七「宗教と文化・文明」 (9) 宗教復興に所載) というのはこういうことを書いた。

「(9) 宗教復興

今や世界は智能の科学界における驚くべき発展により、原子力時代となり、これが軍事力のけたちがいの強大をもたらししている。もし第三次大戦が勃発したら世界は自滅する。今はそついう危機的現実となっている。

実におそろしいのは科学兵器そのものではなく、このようなものを造り、互いに他を倒そうとする人間の心である。心とは何という不可解なものか。こころの中には天国と地獄が混在している。神と悪魔が共在している。否、魔性が神性を圧している。良心の力が極めて乏しい。暴力沙汰が小学生にまで及ぶとは。男の児は昔から武器まがいのもので遊ぶのが好きだ。昔は無邪気だったが、現在は薄れて悪質になってきた。ここに由々しい問題性がひそんでいる。

男は「あらそい」という悪性、女は「ねたみ」という陰性に生まれつき毒されている。いずれも人間の我執という罪性から来ている。だから万人は救済を要する。たましいのある限り、万人は宗教を要する宗教人なのである。それを否定するならば、その人のたましいは地上の生涯のあと、「何処へ往く？」である。

平和々と、政治家も庶民も口には言う。軍備縮小とか、核兵器禁止とか、非戦論とかが唱えられる。しかしもつと積極的に、善隣友好が唱道されないのか。単なる論や、



唱道ではダメだ。善隣友好の実践のほかには道はない。それも、まず、平安を我々自身が魂にもたねば始まらない。平安は神仏との一如的境地に在る。

キリスト教は今や第二の宗教改革を要する。仏教も鎌倉仏教の質的再現を要するのではないか。

要之、^{ようするに}偉大な宗教の復興を要する。キリストや釈迦の開示した原始宗教の次元、その霊的な質の再把握。単なる宗教研究ではなく、經典の身読、霊的体験、体现を要する。絶対次元の聖霊を受霊すると、そこに原始力が臨む。それは愛の力である。そしてこれは万人が無条件に受け得るものである。この危機的現実で火急的に要するものはこれのみである。その道は祈り入るという一事である。南無であり、祈入である。」と。これくらいの短文です。短文にまとめるのがむしろ難しいくらいです。

●我らの国籍は天に在り

ピリピ書3章17節、

17 兄弟よ、なんじら^{もろとも}諸共に我に^{なら}效うものとなれ、且なんじらの模範となる我らに^{したが}循いて歩むものを視よ。18 そは我しばば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。

パウロはかつてキリストの十字架に敵していたから、なおさらひしひしと彼はこのことを言った。それで、自分は自分自身に対して涙を流す。しかも本当に今、そのような福音を受けとつてくれない者のために涙を流す。

19 彼らの終は滅亡^{ほろび}なり。

十字架をなみしたら滅びだと。

おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、みな天道説ばかりで、本当に地動説にならないわけです。

ただ地の事のみを念う。20 されど我らの国籍は天に在り、

我々の本当の故里は天国、私たちは天国の市民であると。「天」というのは「神の国」ということです。

我らは主イエス・キリストの救主^{すくいぬし}として其の処より来りたもうを待つ。

キリストの再臨を待っている。実にそういった終末的な現実の言葉です。

21 彼は万物を己に^{したが}服わせ得る能力^{ちから}によりて、我らの卑しき^{さま}状の体^{からだ}を化^かえて、

己が栄光の体^{かたど}に象らせ給わん。

キリストの栄光の体に私たちを化してください。我々もキリストの証者は最後は、キリスト化されてしまう。しかし、K君はK君らしく、O君はO君らしくして、キリストに化せられる。みなそれぞれそういうことです。百花繚乱なんです。みんな同じ花ではない。そういう多様性における一です。「一即多」とか「多即一」というのはそういう境地です。



太陽の光を受ければ、あの七つ色に反映して虹が生ずる。そのようなことです。虹の雨粒はみんな無色です。ところが、光を受けると、角度によっていろいろな色に、太陽の光を分光するわけだ。もう真理はハッキリしている。

我々は、年の終わりにもう古びたような顔しないで、今日言ったように、新年の新しい字は「カインス」であって、「ネオス」ではない。常に展開してやまずと、そういうのが我々の新年なんです。おわります。

● 祈り

天地万物を創造し、また創造してやまず、この惨憺たる人類の歴史をなお惜しみ、救いを与えんとしていらつしやるところの、キリストのまことのおん神さま。この1981年を迎え、ピリピ書3章を中心に今、兄弟姉妹たちと魂を同じくし、御霊の聖光と聖言の力によりまして、私たちはこの年頭の終末的追求を学び、感謝いたします。

私たちはあなたの終末の世界に向かつて、終末的現実を現実として、あなたからの驚くべき恩寵の御力によって、あなたを求めてやまず、そして、帰りに行くことが本当の前進であり、そしてまた追求してやまざるところに、あなたはまた人々に証しせしめてやまざるところの、その愛の流れをくださって感謝いたします。

どうぞ、悩める者、苦しめる者、求める者、病める者に私たちを通してあなたが力を働かせてくださいますように。そのことが成ることを信じて御名を讃え奉ります。私たちの側の何ものでもありません。主イエス・キリストさま、あなたです。このようにして兄弟姉妹たちとこの新しい年の始めの第一歩を踏み出すことができ、御名を讃え奉ります。進んでやまず、

「我は今日も明日も次の日も進み行くなり」

という、あなたと共に進んでやまざるところの召団であらしめてください。

また、京都、大阪、裾野、奈良、埼玉と、諸所方々に、まだそれから今年は宇都宮また岡山にそれぞれ召団が展開されますが、どうぞ、新しく喜びをもつて私たちこの垣根のない召団を、いよいよあなたがあなたのものとして進ましめたまわんことを願ひ奉ります。本当に今は救いを要します。どうぞ、一人、二人、三人と、この兄弟姉妹たちを通して導き入れ給わんことを願ひ奉ります。……

